



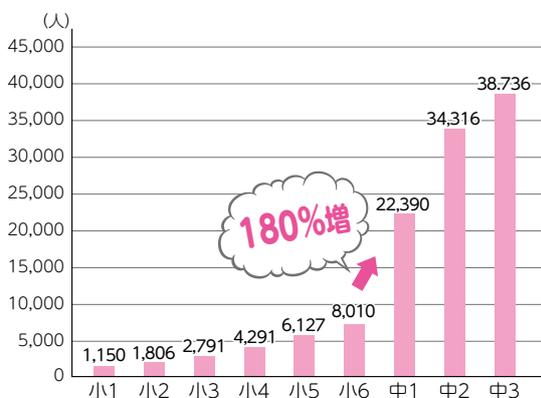
伯耆町が進める「保小中一貫教育」とは 子ども達の「15歳の出口」の姿を見通して 第一回

みなさんは、最近の報道で「小中一貫教育」や「義務教育学校」といった言葉を目にされたり、耳にされたりしてはいないでしょうか。戦後続いてきた6・3制の義務教育が、現在見直されようとしています。その背景には、「小1プロブレム」や「中1ギャップ」と言われるような、校種が変わるときに見られる学校環境への不適応が増加していることが挙げられています。小学校だけが、あるいは中学校だけが力を尽くしても、校種の壁を乗り越えることができない子ども達がふえていることへの対応策を考えるべき時期がきているのです。

本町でも、教育振興基本計画をもとに、「地域とともにある学校づくりを基盤とした保小中連携・一貫教育」を目標のひとつとして、学校教育重点施策を展開してきました。そこには、学校教育が抱える課題への対応ということもありますが、それ以上に、一貫した教育によって「確かな学力」の定着と「人間力」の育成を図りたいという思いがあります。今後、この紙面をとおして広く町民の皆様へ、本町が進める「保小中一貫教育」についてご理解をいただきたいと思ひます。

中1ギャップとは?

学年別不登校児童数生徒数



出典:平成25年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」(文部科学省)

3つのグラフをご覧いただくと、小6と中1で問題行動の明らかな段差があることに気づかれると思います。これがいわゆる「中1ギャップ」といわれる問題です。従来、中学校に入学すると真新しい制服に身をつつみ、気持ちを一新して学習や部活動に取り組む生徒が大多数でした。ところが、思春期という年齢特性もありますが、小学校と中学校の学校環境の違いに適應できない生徒が増加しつつあることが指摘されています。そもそも小学校と中学校には、一般的に次のような環境の違いがあります。

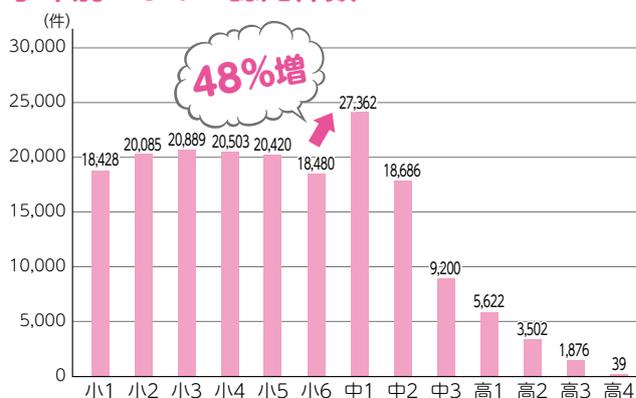
小学校

- ◇学級担任制(主に1人の担任が教える)
- ◇きめ細かく指導・グループ学習
- ◇単元テスト重視、意欲・関心・態度の重視
- ◇緩やかな生徒指導
- ◇部活動なし

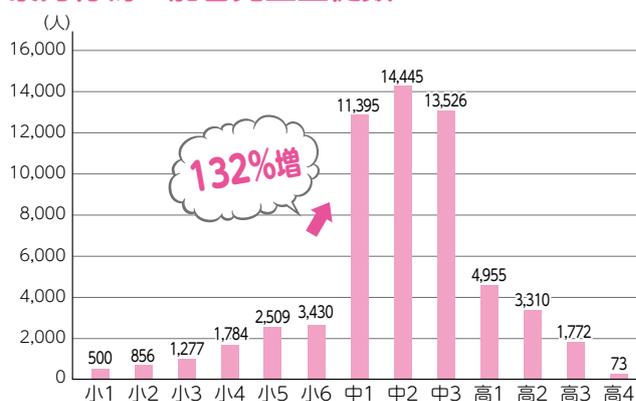
中学校

- ◇教科担任制(複数の教科担当が教える)
- ◇板書が多い、スピードが速い、教師主導型
- ◇定期考査重視、知識・技能の重視
- ◇より厳しい生徒指導
- ◇部活動あり
- ◇他の小学校からの進学者との新たな人間関係

学年別いじめの認知件数



暴力行為の加害児童生徒数



小学校と中学校のそれぞれの教育のあり方は子ども達の年齢特性に配慮したものであり、長年の教育活動に基づいた効果的な積み重ねがあります。小中それぞれの教育の良さを認めた上で、「中1ギャップ」が突きつける課題は、子ども達にとって小学校から中学校への急激な環境の変化をいかに緩和するかということです。

「小中一貫教育」は、小中のつなぎ目の部分に目を向けていく教育であり、小学校と中学校の教職員がお互いの環境の違いを理解した上で、学習指導と生活指導の円滑な接続を図るための様々な手立てを開発していく視点を取り入れるようにするものです。さらに、本町の「保小中一貫教育」では、保育所と小学校の接続も視野に入れていきます。詳しくは、次回以降でお知らせします。

【問い合わせ先】教育委員会事務局 総務学事室 ☎62-0927